

レンズ越しに見えた未来



落ちないように、三脚をしっかり固定

「カメラはいつでもどこでも、四季を通じて楽しめるのがいいですね。1日撮って、1枚でもいい写真があるとうれしくなります」と写真の魅力を話す堅木さん。きょうもその1枚を求めて、レンズをのぞく堅木さん

四年前、ゴルフ場でせん定作業中に四メートルの高さから落下し、首の骨を骨折。堅木六郎さん（63歳・的場）は、首から下が動かさなくなるという、重度の障害を負いました。その後、治療とリハビリによって、わずかに右手が動かせるようになりました。しかし、「こんな体を人に見られたくない」と自宅に引きこもってしまいました。

転機が訪れたのはおよそ一年前。訪問リハビリに来た作業療法士から「気晴らしに」と、写真を撮ることを勧められたのがきっかけでした。

*◎は、堅木さんが撮影した物です。

それまでインスタントカメラくらいしか使ったことのなかった堅木さん。訪問リハビリの作業療法士や知り合いの障害者に、一眼レフカメラの使い方を教えてもらうところから始まりました。自分の家の庭に咲く花や、妻の敏江さんといっしょに出かけたときに目に止まった物を、撮影していたそうです。

「続かないと思っていたんですよ」と話す敏江さん。その予想に反して、堅木さんは写真を撮り続けました。写真を撮るために、行動範囲も徐々に広がり、一人で出かけることも増えました。「最近では、遠くに行きすぎて心配です」と、敏江さんは笑って話します。

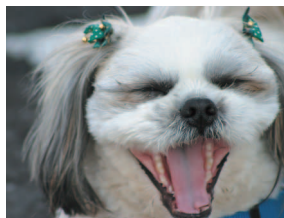
堅木さんは、自分でできないことがたくさんあります。誰かの助けが必要です。一人で出かけたとき、道行く方に声を掛けると、手助けだけでなく、会話も広がります。「何を撮っているのですか？」「この角度から撮るといいよ」……。たくさんの人に接することで、気持ち



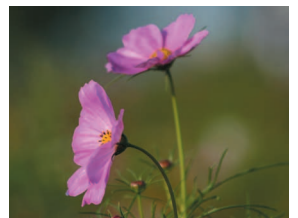
昨年3月に撮影した紅梅。
「このころから、写真が楽しくなりました」☺



昨年12月8日に撮影。
「初冬の富士」☺



大切な家族の一員。
愛犬「バリー」☺



安比奈親水公園まで1人で行くことも。「コスモス」☺

野生動物の撮影にも挑戦。「鳥たちの朝」☺



お気に入りの1枚。「小春日和」☺



平成16年11月に、
初めて撮った写真☺



カメラの向きの調節には、右手とあごを使います

シャッターは、右手親指の爪で押します



明るくなりました。同時に、写真に対する思いも高まってきました。写真は、自分だけでなく、家族も笑顔にしてくれる大切な物。最近では、晴天の日は毎日のように、カメラを持って出かけています。「もっとカメラを知りたい」「ことは、風景写真を多く撮りたい」「私の写真を見て、障害のある人が少しでも元気になつてほしい」「私を元気にしてくれた皆さんへ、恩返しをしたい」。堅木さんがレンズ越しに見る世界は、これからも広がっていくでしょう。